

アナウンス部門 [課題]

次の三つの文章から一つを選んで、読みを録音してください。

※ 「課題」、「クレジット」、氏名は言わないでください。

※ 読点は省いてあるので、工夫して読んでください。

※ 文章の改作は認めません。課題文をそのまま読んでください。

- ① 書道部と吹奏楽部が協力して一年生に向けたパフォーマンスを行います。吹奏楽部の演奏に合わせて書道部の6人が一文字ずつ大筆（おおふで）を使って文字を描きます。この瞬間にしか作れないアートな作品をぜひご覧ください。

- ② 保健委員会からのお知らせです。新しい生活様式に協力して校内ではマスクの着用を心掛けるこまめに換気を行いましょう。また うがいや手洗いもしっかりと行いましょう。一人一人の行動がみんなの命を守ることに繋がります。

- ③ 来年度の全国大会は東京都で開催されます。NHKホールの改修のため決勝の会場として日本工学院蒲田キャンパスの地下にある片柳アリーナをお借りしました。来年はオリンピックムードあふれる東京でお会いしましょう。

朗読部門 [課題]

次の三つの文章から一つを選んで、破線の部分だけを録音してください。

※課題文にはクレジットや「作者名」「作品名」などはつけずに読んでください。

(橋本 績 「流れ星が消えないうちに」 新潮文庫より：NHK 杯 63 回大会朗読課題本)

- ① 子供のとき、この溝は恐ろしく深く見えた。地獄の穴のようだった。

大人になった今では、そこまで深くは感じないけれど、やっぱり危険な場所だった。いちおう塀はあるものの、膝くらいの高さしかなくて、その向こうは急角度の石積み壁だ。

十一歳の加地君は、ここに落ちた。八年後、もっともっと深い穴に落ちた。

そして這い上がれなかった。

「加地君、落ちちゃった」

わたしは同じ言葉を繰り返した。

「落ちちゃったの、加地君」

今まで避けてきた彼の名前が、わたしの口から溢れ出してきた。避けてきたその分を取り戻すかのように、ひたすら彼の名前を呼んだ。加地君。口にするたび、思いも溢れ出してきた。加地君。月光に染まった夜の空気がびりびりと震えていた。

- ② なんでもないこういう日々――。

いろいろなことを話しながら一緒に買い物をしたり、レジ袋を二人で持って歩いたり、その袋を「貸せよ」と当たり前のように巧君が持ってくれたり、ふたりで SMAP の曲を鼻歌で歌ったり。

それはとても幸せな瞬間だった。

ありふれていることかもしれないけど、だからといって、ちっとも輝きは褪せたりしなかった。こうして、いつまでも、どこまでも時間が流れていけばいい。ときには辛いことや苦しいこともやってはくるだろうけれど。

ああ、いや、すでに来た……来てしまったんだ……。

どうしようもなく辛く苦しいことはやってきて、いまだに去っていない。わたしたちの心の中で、化膿してしまった傷のように、じんじんと痛みと熱を放ち続けている。けれど、そういう痛みを抱えながらも、当たり前の日常があるのなら、巧君と鼻歌なんか歌えたりする瞬間があるのなら、わたしは生きていけると思った。

わたしは肉やら野菜やらがいっぱい入ったレジ袋を頑張って持ち上げ、右手の人差し指で目の端をごしごし擦った。ねえ、加地君。わたしはこれからも生きていくよ。こういう瞬間に幸せを感じながら、少しずつ君のことを忘れていくよ。だけど、本当に忘れてはしないよ。

③ 「探し物があつたから二階の納戸に行ったら、これを見つけてな。若いころ、読んだことがあるんだ。懐かしくなつて、読み返してるところだよ。まだ半分くらいしか読んでないから、しばらく借りていていいか」

「いいよ。それ、おもしろい？」

わたしはパジャマのまま、お父さんの隣に腰かけた。やけに暖かくて、春を感じさせる穏やかな日差しがわたしとお父さんの足元でのんびりと揺れていた。以前、同じように、こうして窓辺に並んで腰かけたことがあつた。あれはいつのことだろうか。まだわたしはずいぶん幼かつたはずだ。記憶にあるわたしの足は、もつともつと小さかつたから。

「おもしろいぞ。若いころに読んだときとは、また違う感じがするな」

「そんなもの？」

「ああ、全然違う。前もわりとおもしろい話だと思つたんだが、今読むとさらにおもしろい。川島君が言つていた通りだよ。立っている場所が変わると、同じ風景でも違うように見えるものなんだな」

それは、加地君の言葉。覚えていた巧君が、お父さんに言つた。そして今度は、お父さんがわたしに言つている。言葉や思いはこうして巡っていくのだ。

もうこの世にはいないのに、加地君の思いは確かにお父さんにまで伝わっている。

「わたしもいつか読んでみようかな、その本」

自然と、そんな言葉が出ていた。